

◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第7回 / 白金今昔(その1)

Residence of Prince Asaka 1933—

東京都庭園美術館は、標高25メートルから30メートルを測る高台上に位置しています。この高台は古くから白金台と呼ばれ、秩父山麓に端を発する武蔵野台地の東端部分にあっています。付近には麻布台、高輪台、三田台などの台地が続き、約6,000年前にピークを迎えたいわゆる縄文海進の頃には、古川や目黒川などの河川や海からの侵食によって形成された谷に沿い、これらの台地のすぐ近くにまで東京湾の海岸線が入り込んでいました。当時は栃木県付近まで達していた海岸線や川筋に沿って、各地で縄文時代の貝塚遺跡が多数発見されていますが、当館周辺でも伊皿子貝塚や本村町貝塚など、この時期の代表的な遺跡がみつかっています。当館や隣接する自然教育園内ではまだ明確な遺跡の存在は確認されてはいないものの、この付近にもやはり往古から集落が形成され、人々が生活を営んでいたと思われます。

戦国時代に記された史料には、永禄年間(1558-1569)に太田道灌の曾孫、新六郎康資が白金一帯を領していたと伝えていますが、この地域の記録がより明確になるのは近世になってか



図2

らのことです。江戸時代中頃にまとめられた各種文献には、「中世この地に“白銀長者”なる者が居住していた」という逸話が収められています。『江戸志』に「相伝て云、往古此所に白銀長者と云者あり、代々富饒にして住す、故に爰を白銀と云よし」*1とある長者伝承は、他の文献では渋谷の“黄金長者”と組み合わせられて、両者のロマンチックな恋愛譚として語られています。真偽はと



図1

もあれ、このような物語の成立にあたっては、原型となる何らかの歴史的背景があったと思われる。『御府内備考』などの史料には、長者の素性を室町時代初期に京都から下ってこの地に居を構えた下級役人、柳下上総之介を祖とする郷土の一族とし、その子孫が江戸時代には白金の名主になっていたと記録されています。

現在、自然教育園内には中世の館跡とされる土塁(土手状に土を盛って築いた防塁)遺構が保存され(図1)、一部は美術館敷地内にまで続いています(図2、3)。先の伝承を元に、この土塁に囲まれた一画を“白金(銀)長者”柳下氏の居館跡に比定する説もありますが、最近の調査や研究では両者を結びつけるだけの明確な根拠は見出せず、また土塁そのものの築造年代についても再検討の必要性が提起されています。*2
(次号に続く/牟田)

*1「高輪 白金—その2」、『港区の文化財 第10集』、港区教育委員会、1974年、41頁

*2 加瀬文雄「白金館址と柳下氏」、『研究紀要3』、港区教育委員会(港郷土資料館)、1995年

*撮影協力: 国立科学博物館付属自然教育園
東京都港区白金台5-21-5 Tel.03-3441-7176



図3

図1.自然教育園内に残る「館跡」の土塁は、比較的古い時代のものと思われます。園内には他にも土塁遺構がありますが、築造年代については中世から近代と幅広い見解が出ています。

図2.当館北側の倉庫付近に見られる土塁跡。「館跡」から続く土塁は朝香宮邸造営時に敷地内に取り込まれ、庭園の築山や植え込みの一部とされていたようです。

図3.当館に残る土塁の一部。宮邸造営時に1-2mほど盛土されているため、今日見ることのできるのは上端部のみとなっています。